

二重のアイデンティティー —マルセル・シュウォブ「黄金仮面の王」をめぐって—

鈴木重周*

マルセル・シュウォブ (Marcel Schwob, 1867-1905) は十九世紀末に活動したユダヤ系フランス人作家である。本稿では、シュウォブのテキストと生涯を考察するにあたって、彼が生きた世紀末という時代と、彼がユダヤ系フランス人であるということに着目したい。と言うのも、この時代にはシュウォブをはじめとするユダヤ系フランス人たちが自らのアイデンティティーに直面せざるをえない大事件が起こるからである。その事件とは言うまでもなくドレフュス事件であり、シュウォブが最も旺盛に執筆活動をしていた時期は、反ユダヤ主義が勢いを増していた時期であり、まさにそのような時代の空気の中でドレフュス事件は展開していくのである。シュウォブのようなユダヤ系フランス人にとっての世紀末とは、自らのアイデンティティーを揺さぶられる激動の時代であった。その時代にユダヤ系フランス人として生き、書いたシュウォブとはどのような作家なのだろうか。もともと、古代ギリシアから現代英文学に至るまでの広範な読書を背景としたシュウォブの作品は「模範的なコント」として同時代の作家たちからも高い評価を得ており、ヴァレリーやジャリなどは主著を捧げている。本稿の目的は、単に世紀末のコント作家としてだけでなく、この時代に生きたひとりのユダヤ系フランス人としての作家シュウォブの姿を、彼の代表作とされる一編のテキストを考察することによって浮かび上がらせることである。

* 欧米文化研究コース博士前期課程2004年3月修了
現在、欧米文化研究分野博士後期課程在籍

仮面の物語

シュウオブの第二小説集『黄金仮面の王』(*Le Roi au masque d'or*, 1892)は、『二重の心』と同様、主に「エコー・ド・パリ」紙に発表されたコントを集めてオランドルフ社より出版された。この『黄金仮面の王』にも、『二重の心』序文ほどの長さではないものの、作者自身の文学観を表明する場としての序文が付されている。

「私は仮面と、仮面に覆われた人物たちがいる書物を著した*1」という書き出しで始まるこの序文は、後に『随想集』(*Spicilège*, 1896)に「相違と相似」(*La différence et la ressemblance*)*2というタイトルで再録されることになるのだが、まずはその内容を確認してみたい。シュウオブによれば、「相違」とは「個性的なもの」、「相似」とは「一般的なもの」であり、双方とも見る側からの観点によるものでしかない。「私たちはある一人のシナ人を他のあるシナ人から識別することはできないが、羊飼いは自分の羊たちを私たちには見えない記号によって識別することができる*3」。つまり、私たちがある対象に感じる「相違」も「相似」も対象自体に存在するものではなく、それらの対象が持つ「記号」を識別できるかという見る者の観点の問題であるとしている。この序文を手がかりとしながらシュウオブの最高傑作とされる「黄金仮面の王」の筋を追っていきたい。「黄金仮面の王」とは、一言で言えば「仮面」の物語である。「仮面」とは何か、テキストにおいて「仮面」はどのような役割を演じ、そしてなぜシュウオブはそれを描いたのか、テキストを読みながらこの問いの答えを探してみたい。

* 1 Marcel Schwob, *La différence et la ressemblance*, in *Spicilège*, Mercure de France, 1960. p.145.

* 2 *Ibid.*, pp.145 - 151.

この物語の主人公である黄金の仮面を被った王の宮廷では、素顔をさらすことは禁じられ、全ての者が仮面を付けている。

肉の顔を失った王に倣って、女も道化も神官も、それぞれが銀、鉄、銅、木、布の、動かない仮面を被っていた。道化の仮面が笑いに口を開いているのにひきかえ、神官の仮面は憂いをたたえて暗かった。五十の陽気な顔が左の方に喜びの表情を作り、右の方では悲しげな五十の顔がしかめ面をしている。一方、女たちの顔に垂らした明るい色の布は、人工の微笑をたたえた永遠に優雅な容貌を模していた。しかし黄金の仮面は威厳に満ちて気高く、真の王のものであった*4。

道化の笑い、神官の憂い、女の微笑、そして王の威厳、宮廷に存在する者たちの表情は全てがそれぞれ被る仮面によって演出され決定されたものであり、「動かない仮面」しか存在しないこの異様な宮廷こそ、シュウオブが序文で語った「相似」の状態であり、それぞれの仮面を付けた表情に「相違」は存在しない。しかし、シュウオブによれば、「相違」も「相似」も観点の問題であり、「別世界からの訪問者」がそれらを「想像力」によって識別する。序文で語られた通りに、物語には「別世界からの訪問者」が導入され、この人物の登場によって「動かない」宮廷の場面が動き出すのである。突然の訪問者の様子を王に尋ねられた衛兵は、「国々を巡礼する信心深い乞食のようです。顔は覆われておりません*5」と答える。黄金仮面の王の宮廷では、「王宮に近づく者は顔を覆うべし

* 3 *Ibid.*, p.145.

* 4 Marcel Schwob, *Le Roi au masque d'or*, in *Œuvres*, Les Belles lettres, 2002. p.205.

* 5 *Ibid.*, p.206.

という掟が太古の昔より定められていて、王の一族は仮面を付けた人間しか見たことがない*6) のだから、当然「顔の覆われていない」訪問者は追い返されるのが習わしであった。しかし、「王の心に悪しき欲望が入り込んだ*7)」ために、王は周囲の反対を押し切って訪問者との謁見を許可する。この場面において、王は「素顔の人間を見てはいけない」という王族代々の禁忌を「悪しき欲望が入り込んだ」ことによって破ることになる。「入り込む」と訳した、テキストに用いられている *ramper* という動詞は「蛇などが這って進む、絡みついてくる」というイメージを持つ語である。「黄金仮面の王」に詳細な注を付けたモーリス・ムリエは「この語のイメージは強烈である。王の心のうちに、知ることへの欲望が蛇のように絡みついている*8)」と述べ、ジュトランはこの *ramper* という動詞の持つ蛇のイメージが「創世記」に記されたアダムとイヴが禁断の果実である林檎を嚙む場面に通じていると分析している*9)。確かに、アダムとイヴに林檎を嚙むことへの欲望を芽生えさせたのは蛇であり、彼らは蛇の誘惑によって原罪を犯してしまう。この物語の主人公である王に入り込んだ、仮面を付けていない者と対面するという先祖代々の禁忌に背く「悪しき欲望」によって、素顔をさらす乞食との対面を許してしまうのだ。

王に謁見を許可された乞食は、自分が盲目であることを断ったうえで、こう語り出す。

* 6 *Ibid.*, p.205.

* 7 *Ibid.*, p.206.

* 8 *Le Roi au masque d'or*, Édition commentée par Maurice Mourier, Librairie Général Française, 1999. p.32.

* 9 Monique Jutrin, *Marcel Schwob, Cœur double*, Éd. de l'Aire, 1982, p.89.

「女たちの美しさも、お前様の美しさも、私は盲なので何も分かりません。だがお前様こそ、他人についても自身についても何も分かっておられない。私は自分が何も知らぬことを知っているという点でお前様より優れている。それに私は推測することができる。お前様に道化と見える者たちはおそらく仮面の下では泣いているだろう。神官と見える者たちはお前様をだます悦びに顔をゆがめているかも知れないし、女たちの頬があのかげで灰色をしていないかどうか、お前様には分からないでしょう。そしてお前様自身、黄金仮面の王が、その仮面の飾りに反して恐ろしい顔をしていないとは誰が分かるものか*10」

「仮面の特徴の一つ、それは偽ることである。自己を、他者を、あるいは同時にその二つを」とトレンブリーは述べている*11が、外部からの侵入者であるこの盲目の乞食の言葉によって、素顔を隠蔽しながら別の顔をさらすという仮面の持つ欺瞞、真実を覆いながら別のものを表現するという役割が暴露される。盲目であるがゆえにその欺瞞に惑わされることのない乞食は、女、道化、神官という王を囲む者たちが、実はその仮面とは裏腹の心を持っているかも知れず、そして絢爛たる仮面を被った王の素顔が、その煌びやかで美しい黄金の装飾に反して、実は恐ろしい、醜いものなのではないかという不気味な預言をした後に、その場を閉め出される。序文に沿って言えば、「別世界からの観察者」がまさに「相似」と「相違」とを識別したのである。ジュトランはこの乞食のうちに旧約聖書の預言者イザヤと「無知の知」のソクラテスのイメー

*10 *Le Roi au masque d'or*, p.208.

*11 George Trembley, *Marcel Schwob, faussaire de la nature*, Droz, 1969, p.31.

ジが同時に見られることを指摘し、「乞食はその言のうちに聖書的預言とギリシア的叡智とを結び付けている。このように冒頭から、西洋と東洋とは同一の形象のなかに結合され、両義的な同一の言語に混じり合う*12」と述べている。テル・アヴィヴ大学教授であるジュトランは、シュウオブの諸テキストを「ユダヤ」という観点によって分析しているが、彼女によれば「黄金仮面の王」には、乞食という登場人物のみではなく、かなりあからさまにユダヤの記号がちりばめられており、テキストは単にユダヤ的であるだけではなくキリスト教的な、西洋的であるだけでなく東洋的な、さまざまに異なった世界観の交叉点である。本稿では、シュウオブの博識から生み出される様々な要素の「交叉点」としてだけでなく、よりシュウオブ自身の状況に引きつけることによって、「黄金仮面の王」に新たな解釈を提示したい。

王と癲者

乞食による不吉な預言を聞いた王は、再び「悪しき欲望」に突き動かされて宮殿をさまよう。盲目の乞食によって「本当のお前は何者か」という存在にとって根元的な問い、いわば自分のアイデンティティーに関する問いを投げかけられた王は、仮面の下に隠れた自分の素顔を見るために、本当の自分は何者であるのかを知るために、鏡を探しているのである。しかし「広い王宮のどこを探しても鏡は見つからなかった。遠い昔から神託の命令と神官の法度でそのように決められていたのである*13」。そこで王は王宮を抜け出し、森の中へと入っていく。

*12 Monique Jutrin, *op.cit.*, p.89.

*13 *Le Roi au masque d'or*, p.207.

彼は身を震わせ、好奇心に満ちていた。いよいよ他人の顔に、恐らく自分自身の顔に会いに行くのである。心の底では、自分の生来の美しさを確かめたいと思っていた*14。

生まれてから一度も自らの像として黄金の仮面以外のものを見たことがない王にとって、仮面の下素颜は「恐らく自分自身の顔」という全くの未知のものであった。その素颜は自らが被っている黄金の仮面の煌びやかさに匹敵する「生来の美しさ」をたたえているはずであり、今まで自己を規定してきた仮面に、本当の素颜を一致させたいという王の願いを読みとることが出来る。自らの姿を映し出すものを探しながらたどり着いた森の外れで、王は一人の娘と出会い、その美しさに魅了され、「こんな黄金の仮面など外してしまいたい。あなたの肌に口付けしようというのに、こんなものがあっては気分が出ない。これから二人で川の水に姿を映して楽しみたい*15」と娘の前で仮面を外す。

王はもどかしげに黄金の掛け鉤を外した。仮面は草のなかに転がった。すると彼女は両手で眼を覆って恐怖の叫びをあげた。(中略)

彼は土手に駆けつけ、河面に身をかがめた。王の本当の唇から、しゃがれた呻きが洩れた。(中略) 今彼が見たものは、白く腫れ上がり、かさぶたに覆われた顔であった。その皮膚は忌まわしい腫れでむくんでいた。書物で読んだ記憶から彼はすぐに、自分が癩を病んでいることを悟ったのである*16。

*14 *Ibid.*, p.207.

*15 *Ibid.*, p.208.

*16 *Ibid.*, p.208.

この場面において王は、仮面を外して素顔を見る、という一族代々の禁忌を破ったことによって、実は自分が癩（ハンセン病）を病んでいたことを知る。乞食の不気味な預言の通り、仮面と素顔とは一致しないものであったのだ。「鏡を見ること」の禁止は、王族が癩を病む一族であるということを隠蔽するためのものであった。王宮では、自分は誰であるのかという問いを王から遠ざけるために、宮廷内にいる者は全て王と同じく仮面を被らなくてはならず、仮面を付けていない者に会うことも禁じられていたのである。自らの本当の姿を知ることに対するこの二つの禁忌を破り、素顔の乞食と謁見し、自己を知ることへの欲望に突き動かされて仮面を外し河面をのぞき込んでしまった王は、「しゃがれた呻き」とともに、自らの内に存在する決して一致することのない二重のアイデンティティーに直面してしまう。それは、権力の頂点にいる強者としての王、そして古来より徹底的に忌み嫌われてきた弱者としての癩者という、全く相反するものであった。ここに現れるこの「二重性」こそが『二重の心』序文から続くシュウオブのテキストの特徴なのである。『二重の心』では相反する心の動きの総合と、外的事件と内的事件との総合がテーマとなっていたが、『黄金仮面の王』では、その「二重性」というテーマがよりテキストの主人公に引き寄せられ、「二重のアイデンティティー」として展開されるのである。

そして、自らのアイデンティティーの二重性を知ってしまった主人公にとっての「仮面」は、単に素顔を覆うための装身具から、王であり癩者であるという、強者と弱者との反転の装置としての役割を担うことになる。言い換えれば、彼は自らの二重のアイデンティティーを選択できる装置を手に入れたのだ。彼は再び煌びやかな装飾の施された黄金の仮面を被り、王宮へ戻って行く。そして王は歴代の王、つまり自らの祖父、父の肖像画が並ぶ画廊へと向かう。

そこ、交叉した対角線で仕切られた壁面には、燦然たる謎めいた肖像画が並んでいた。(中略)ただ最も古い肖像が、ひとつだけ他のものと離れておかれ、それは恐怖で目を見開いた蒼白の青年のものであった。顔の下部は王者の飾りで隠されている。王はその画像の前に足をとどめ、燭台をかざしてそれを照らした。そして呻きを漏らした。「おお、私の血統の初代よ、同胞よ、私たちはなんと哀れなのだろうか」。そして肖像の目に口付けした。

それから仮面を付けた第二の肖像の前に立ち止まり、こう言いながら仮面を描いている画布を引き裂いた。「こうするべきだったのだ、父よ、我が血統の二代目よ」。こうして彼は血統の全ての王たちの肖像を、自分自身のものに至るまで引き裂いた*17。

まず彼は「顔の下部は王の飾りで覆われている」、「恐怖で眼を見開いた蒼白の青年の肖像」の前に立ち、「同胞よ、私たちはなんと哀れなのだろうか」と語りかけ、その目に接吻する。ところが、次の「仮面を付けた第二の肖像」の前では「こうするべきだったのだ」と言いながら画布を引き裂いてしまう。なぜ彼は、初代の肖像には口付けし、二代目のものは引き裂いたのであろうか。初代と二代目の肖像を分けるもの、それはまさに彼らが付けている「仮面」であった。初代の王は「顔の下部」しか仮面で覆われていない。生まれた時から仮面を被っている他の王とは異なり、初代の王は、自ら癡者であることを知り、絶望し、恥じ、そして顔の下部を覆ったのである。だからこそ、「恐怖で眼を見開」いている初代の肖像に、真実を見てしまったその目に、苦悩を共有する者として彼は「同胞よ」と語りかけ接吻したのであった。一方、「仮面を付

*17 *Ibid.*, p.209.

けた」父である二代目の王は、仮面を付けさせられることによって欺瞞の世界に生きていた。自分が何者であるかという真実を知るために、一族の禁忌を破り仮面を脱ぎ去った主人公には、仮面を付けたまま、自らの存在の欺瞞に気付くことがなかった父が許せなかったのである。

ジュトランは「この苦しみの中での同胞愛が、あらゆる時代を通してユダヤ民族にとっての強い絆ではなかったか」と問いかけ、王の言葉にある「血統」(race)という語は、十九世紀末フランスではユダヤ人であれそうでないものであれ、「ユダヤ」を表す象徴として用いられていたと指摘する*18。確かに、ドリュモンを初めとする反ユダヤ主義者がしきりに騒ぎ立てたのは人種(race)としてのユダヤ人とフランス人の差異であった。ユダヤ人とフランス人では「人種」が違うので、どれほど巧妙に隠してもユダヤ人たちはフランス人には同化することができないという「自由公論」紙流の言説である。

「黄金仮面の王」においては、その「血統」は王家に受け継がれる「癩」を示している。王であるという自らのアイデンティティーを、「癩」によって覆された主人公も、フランス人とユダヤ人の間で確固たるアイデンティティーを獲得し得なかった十九世紀末フランスにおけるユダヤ人たちも、同じ苦しみを共有する「同胞」なのである。さらに言えば、「その人は汚れた人であるから、離れて住まなければならない。すなわち、その住まいは宿営の外でなければならない」と「レビ記」に記されているように、聖書の時代より「癩」はキリスト教社会から徹底的に忌み嫌われ、中世においてはユダヤ人と癩者とはともに共同体から隔離される存在であったのだ。一族の「血統」によって伝えられた「癩」が、このテキストでは「ユダヤ」を喚起させる記号となり、強者と弱者との間で

*18 Monique Jutrin, *op.cit.* pp.91-92.

自己の同一性を決定できない主人公の姿に、シュウォブ自身の姿を重ね合わせるができるのである。

先代の王たちの肖像画を引き裂いた主人公は、銅鑼を打ち鳴らして王宮の者たちを集める。そこで彼は「乞食の言は真実であった。お前たちは皆、私を欺いている。仮面を外せ*19」と宮廷の全ての者に命ずる。仮面を外した者たちの素顔は、果たして乞食の預言通りのものであった。憂いを湛える仮面の神官たちの素顔には「肥った笑い」があり、道化の素顔は「悲しみにやつれ」、女たちの素顔は「倦怠と醜悪に満ちていた」。全ての者が身に付けている仮面とは正反対の表情をしていたのである。王はこれまでの欺きを嘆いた後、「しかし私はお前たちのなかの誰よりも悲惨なのだ。私は王であり、私の顔は王らしく見える。ところが、実はこのように、私の王国の最低の者でさえ、何も私を羨むことなどない*20」と語って仮面を外す。癩者であることを自ら衆人に暴露し、強者から弱者へと再び反転した王は、こう語り出す。

「いつも同じ黄金の面を我らに向けるあの月も、おそらく暗く残忍な別の面を持つのだろう。同じように、私の王権も私の癩病を隠蔽することで保たれてきた。だがもうこの世のうわべなど見たくはない。暗いものへ眼を向けたいのだ。ここに、お前たちの目の前で、私は自らの癩と虚偽ゆえに自らを罰する、私とともに我が種族を。」

王は黄金の仮面をさし上げた。黒い玉座の上に立ち上がり、一同のざわめきと嘆きのなかで、仮面の両側に付いている鉤を、苦痛の叫びとともに眼に突き立てた*21。

*19 *Le Roi au masque d'or*, p.211.

*20 *Ibid.*, p.211.

*21 *Ibid.*, pp.211-212.

盲者である乞食が仮面に隠された素顔を見破ったように、「暗いものへ眼を向けるため」に、見えるものに欺かれないために主人公は自ら盲者となるのである。癩者であり盲者であるという二重の弱者になった彼は夜のなかへと飛び出し、あてもなくさまよい歩く。盲目になったがゆえにその視線は自分自身の内部へと戻り思索に沈む彼の耳に鈴の音が聞こえてくる。盲目となった彼には見えないが、癩病のために鈴を付けた若い娘がやってきたのだ。彼女は「惨めなる者たちの町*22」に帰る途中であることを告げる。

このテキストの舞台であると思われる中世キリスト教社会では、「レビ記」の記述通りに、癩者は伝染を防ぐために共同体の外部へと徹底的に隔離された。娘が付ける鈴は自分が癩を病んでいることを周囲に知らせるためのものであった。王族代々の欺瞞に終止符を打ち、仮面を脱ぎ自ら盲者となった主人公は「惨めなる者の町」へ娘とともに行くことを決意する。

「さあ、町ですよ。見えてきたわ」娘は言った。

「私は一人で他の町へ入って行こう」盲目の王は言った。「私の望みはただひとつ、この唇をあなたの唇の上に休ませることだった。きっと美しいだろうあなたの顔によって、生氣を取り戻したかった。だがそんなことをすればあなたを汚すことになっただろう。私は癩を病んでいるのだから。」

そう言い終わると、王は死のなかへと姿を消した。

娘は声をあげてすすり泣いた。盲目の王の顔が清らかに澄んでいるのを見て、自分こそが彼を汚す者だとよく分かっていたからである*23。

*22 *Ibid.*, p.212.

*23 *Ibid.*, p.213.

「この世のうわべなど見たくはない」と言って眼を突いた王の顔は「清らかに澄んでい」た。この直後の「おそらく、眼からほとばしった心臓の血が、この人の病を癒したのだろう。惨めな相貌をしていると思いこんで彼は死んだが、今は全ての仮面を、黄金の、癩の、肉の仮面を脱ぎ捨てたのだ*24」という再び登場した乞食の言葉で物語は締めくくられる。欺瞞の仮面によって覆われていた癩を自らの素顔に発見した主人公は、癩者として生きることを選択した。この選択によって主人公は癩を癒され、「全ての仮面を脱ぎ捨て」、偽りのない自己を獲得し、死んでいった。ジュトランは彼を「新しいオイディプス」にたとえ、「しかしこのギリシア神話は急展開し、決して約束の地に入り込めないであろうこのユダヤの預言者の物語に脇道から近づいている。(中略)王宮を追い出され、王は塔と城壁とに囲まれた彼の城塞とは異なる住居へ、一時の「ゲッター」へと向かうのである*25」と述べている。ジュトランはテキストにちりばめられたさまざまなユダヤの記号を読みとりながら、「惨めなる者たちの町」へ向かおうとした主人公の姿に、約束の地を求めながらもゲッターへ追いやられたユダヤ民族の歴史を見ているのだ。

ジュトランも指摘するように、この場面には運命に翻弄され自らの眼を突いて盲目となるソフォクレスの悲劇との共通点が見受けられる。しかし、このような身体損傷と死による浄化というテーマは、「オイディプス王」だけではなく、フロベールの『サランボー』(*Salammbô*, 1862)、ユイスマンスの『スヒダムの聖女リュドヴィヌ』(*Sainte Lydwine de Shiedam*, 1901)などシュウオブと同時代の作品にも認められる。グリユネーヴァルトの宗教画に衝撃を受け、「神秘的自然主義」という独自の

*24 *Ibid.*, p.213.

*25 Monique Jutrin, *op.cit.*, p.95.

論を抱くようになったユイスマンスは、中世オランダの「聖人伝」を陰惨極まる病の描写とともに再構成した。リュドヴィナの身体が病によって冒されれば冒されるほど、彼女の聖性は高まり、人間の罪は彼女の身体の損傷によって贖われる。この「贖罪としての病」を体現するリュドヴィナの身体は、数知れぬほどの病に蹂躪されて死を迎えた後、病に冒される前の美しい少女の姿に戻るのである。「黄金仮面の王」での仮面は、王族が癩を隠蔽するためのものであり、彼らの欺瞞の象徴である。その罪を贖うためには、仮面を外し、自らの癩を公表する必要があった。欺瞞という「この世のうわべ」と自分自身を断罪するために、王は自らの身体を損傷し盲目となるのだが、その時に流れる血によって罪が贖われ、彼の病は癒される。このラストシーンでの浄化には、王自らの血が用いられている。ジュトランは「血」にユダヤの記号を読み取っているが、王が流す「血」には身体損傷による贖罪というオイディプス＝ギリシア的、リュドヴィナ＝カトリック的要素を読み取ることができるのである。ここにも、シュウオブの博識によるユダヤ、ギリシア、キリストの混在が見られるのである。

鏡への怖れ

その死によって「今や全ての仮面を、黄金の、癩の、肉の仮面を脱ぎ捨てたのだ」という結末を迎える「黄金仮面の王」のテキストの背後には、常に「私とは何者か」という問いが潜んでいる。この問いこそが、ドレフュス事件「前夜」のフランスにおいて、自らの意識とは別なところで「フランス人ではないユダヤ人」と名指されたシュウオブ自身の存在に対する問いであった。ドリユモンの弟子である反ユダヤ主義者フェリシアン・パスカルは、「自由公論」紙上で、「黄金仮面の王」を以下の

ように評している。

私はマルセル・シュウォブ氏を著書によってしか知らない。だが、その生活のなかで、彼はできるだけユダヤ人らしくしないよう努めているのではないかという気がするのだが、彼らの人種の本能がその作品になんと透けて見えることだろう！（中略）

黄金仮面の王は、司祭たち、兵士たち、女奴隷たちの前に身をかがめ、我々が恐れているユダヤによる永遠の専制と服従という不吉な夢が、ここ数年来、我々が疑うことなく受け入れてしまっていたその夢が、露見しないようにしているのではないか。しかしながら、その黄金の仮面の下に、専制君主はその癩の醜さを覆い隠しているのだ。ユダヤ人の億万長者たちが、彼らのひけらかすような贅沢の下に、彼らの怪物的な利己主義の惨めさと差し迫った償いへの怖れを隠しているように*26。

「ユダヤによる専制政治」や「ユダヤ人の億万長者」と言った典型的な反ユダヤ主義の語彙を駆使して書かれたこの記事の、「ユダヤの芸術」そして「フランスの芸術」を区別するという考え、このパンフレット作者だけのものではない。当時のフランスでは、シュウォブの友人であり決して反ユダヤ主義者ではなかったアンドレ・ジッドのような知性にまで共有されていたことに驚かされる。

ユダヤ民族の長所はフランス民族の長所とは違うということで私には充分なのだ。そして、彼らフランス人がユダヤ人に比べて理知的で

*26 Félicien Pascal, *La Libre parole* du 28 novembre 1892.
Citée par Monique Jutirin, *op.cit.*, pp.84 – 85.

はなく、忍耐強くなく、あらゆる点で勇敢ではないとしても、彼らが言わなければならないことは彼らによってしか言われないうし、また個人的なものしか価値のない文学の世界に対するユダヤ的長所の寄与は、新しい要素、つまり文学を富ませるものをもたらすよりはむしろ、一民族についての時間をかけた解釈を妨げ、解釈の意味を甚だしく、許し難いまでに歪めてしまうのは事実である。

ユダヤ文学のもろもろの長所を否定するのは、不合理であり、危険でさえある。今日、フランスには、フランス文学ではないユダヤ文学が、つまりそれ自身の長所、意味、方向を持った文学があることは認めなければならない*27。

「自由公論」紙の言説とは全く方向が異なるとは言え、ジッドもまた「ユダヤ文学」と「フランス文学」とに境界を設けている。伝記作者シャンプイオンが「マルセル・シュウオブは自分の起源をユダヤの伝統とフランス文学への崇拜に見出していた*28」と証言しているように、ユダヤ人であると同時にフランス人として生きることを望み、その二重のアイデンティティーの「揺らぎ」のなかに生きシュウオブのような同化ユダヤ人にとって、この「ユダヤ文学」と「フランス文学」という区別は耐え難いものであった。サルトルは「キリスト教徒の乾物屋の親父やお巡りさんより、シュウオブがフランス文学の理解力において劣るなどということが信じられるだろうか*29」と述べているが、十九世紀末フランスに生きる同化ユダヤ人としてのシュウオブは、自らが何者であるかを、

*27 André Gide, *Journal 1889 - 1939*, Gallimard, 1982, pp.397. 24 janvier 1914

*28 Citée par Monique Jutirin, *op.cit.*, p.14.

*29 ジャン＝ポール・サルトル『ユダヤ人』安堂信也訳（岩波書店、一九五六）、九九頁。

フランス文学を愛するフランス人作家であるのか、「セム族にはダンテに、シェイクスピアに、ボシュエに、ヴィクトル・ユゴーに、ミケランジェロに匹敵するような才能を持った人間などいないのだ*30」と反ユダヤ主義者たちから攻撃されるユダヤ人作家であるのかを、自らの意志で選択することはできなかつたのである。ユダヤ人にとって、その選択は他者によってなされるのであり、出版したコントの中では一度たりとも「ユダヤ」(Juif) という語を用いず*31、「母を喜ばせる」ための家族宛の手紙でしか自らがユダヤ人であること表現しようとしなかつたシュウオブの、二重のアイデンティティーの揺らぎが、「黄金仮面の王」のテキストに現れているのである。

鏡と仮面とは、このテキストにおいて、ともに「王＝強者であり癩者＝弱者である」という二重のアイデンティティーを隠蔽するためのものであった。物語では、自らの血によって浄化されるとは言え、王はその二重性を引き受けてしまったがために死へと向かったと読むことができる。いわば、王という地位を捨て、出会った癩の娘と「惨めなる者の都市」へと自己を探す旅に出かけようとしたのである。自分が誰であるのかが分からず、自己を探して呆然とする主人公は、同じく『黄金仮面の王』に収められた「眠れる都市」(*La Cité dormante*)*32にも見出すことができる。

このコントの語り手である「おれ」は「あらゆる国から、あらゆる皮膚の色をした人間が集まって、あらゆる言葉で話し、しぐさでさえ同じでない*33」人々が乗り合わせる海賊船の船長である。船はある都市に

*30 Edouard Drumont, *La France juive*, Flammarion, 1943. p.27.
Citée par Monique Jutrin, *op.cit.*, p.37.

*31 Monique Jutrin, *op.cit.*, p.57.

*32 Marcel Schwob, *La Cité dormante*, in *Le Roi au masque d'or*, Ombres, 1991. pp.129-134.

たどり着くが、そこでは、往来にあふれる人々も、動物たちも、全てが止まっていた。その静寂と不動に誘われるかのように乗組員たちは「それぞれが四色の民のなかから自分の遠い祖国の思い出を選んだ。アジアの者は黄色い人間を抱きしめ、アフリカ人は黒い人をつかまえ、アトランティスの彼方から来た者は赤い人を抱き、ヨーロッパ大陸の者は白人のまわりに腕を投げかけた*³⁴」,そして彼らも蠟人形のように動かなくなってしまう。しかし話者である「おれ」には「祖国がない」ために抱きつくべき肌の色をした人間を見つけることができずに、その場から一人で逃げ出してしまう。このコントの主人公である「おれ」も黄金仮面の王と同様に、自らが何者であるのかが分からないために、その行き場を失ってしまうのである。二人の主人公はともに、確固たるアイデンティティーを持っていないのだ。

当時のシュウオブに関するある証言が残っている。ジッドの日記に記録されている「鏡」をめぐるシュウオブのエピソードは、「黄金仮面の王」の「揺らぎ」を読む私たちにとって非常に興味深い。

マルセル・シュウオブは私が知り合いになったころには、ユニヴェルシテ街の、階と階の間にある奇妙な部屋に住んでいた。(中略)私の思い出す限りでは、この部屋には小さな暖炉があった。この暖炉の上あるいは何かの家具の上に、いずれにせよ一つの鏡があった。そしてこの鏡は布あるいは紙によってほとんど完全に覆われていた。シュウオブはすぐに、自分は鏡が怖いのだ。少なくともそこに自分の顔が映るのを見るのが怖いのだ、と説明した*³⁵。

*33 *La Cité dormante*, p.129.

*34 *Ibid.*, p.134.

*35 André Gide, *op.cit.*, p.814. sans date

シュウオブが鏡を「布あるいは紙によってほとんど完全に」覆っていた、つまり鏡に映る自分と対面することを怖れていた、と言うのである。ジッドはシュウオブの死後四十年以上も経った一九四六年の日記にも、七十七歳の誕生日に自己嫌悪に陥ったことを告白しながら「自分の家の鏡に覆いを掛けていたシュウオブの気持ちがよく分かる」と書いており^{*36}、鏡を怖れていたシュウオブの印象が強烈に残っていたことを思わせる。「黄金仮面の王」の宮廷と同様に、ユニヴェルシテ街のシュウオブの部屋にも「鏡を見ることの禁忌」が存在したのである。このジッドの日記の日付は不明であるが、シュウオブがユニヴェルシテ街に住んでいたのは一八九一年から一八九四年の間であり、「黄金仮面の王」が執筆され、「ルヴュ・ブルー」誌^{*37} (*La Revue Bleue*) と「ロワールの灯台」紙に相次いで掲載されたのは一八九二年の一月のことであるから、「黄金仮面の王」執筆とシュウオブ宅における「鏡を見ることの禁忌」の時期とがほぼ重なるのだ。自分自身の姿をそのまま映す鏡を怖れること、それは自己の像と対面することを拒むことであり、フランス人でありユダヤ人であるという二重の、そしてどちらにも決定することが出来ないアイデンティティーを持つシュウオブの恐怖と心の揺らぎが、ジッドの目には「自己嫌悪」と映ったのである。一方、鏡を覆われたユニヴェルシテ街の部屋で執筆された彼のコントの主人公である王は、自己を映す鏡を求め、河面に自分の姿を映したことによって、最終的には死へと向かっていくのである。

*36 André Gide, *Journal 1939 - 1949*, pp.296.

*37 一八六三年に創刊された「ルヴュ・デ・クール・リテレー」誌が一八七一年に改称されたもの。表紙が青色だったために「ルヴュ・ブルー」と呼ばれる。穏健な折衷主義を旨とし、講演の再録や時評を掲載する。

鏡を見ることの禁止，仮面を被ること，これらは共に自己を正しく認識することへの恐れから来る行為であり，「フランス人でありユダヤ人である」というシュウォブのユダヤ系フランス人としての二重のアイデンティティーが，テキストにおいては「王であり癩者である」という二重性となって主人公にのしかかる。二重のアイデンティティーを持つ者は，自らが何者であるのかという問いに直面せざるを得ないのである。そして二つのアイデンティティーのいずれにも自己をぴったりと合わせることのできない違和感が，王に自ら目を突かせ，死へと向かわせるのである。「全ての仮面を，黄金の，癩の，肉の仮面を脱ぎ捨てたのだ」という言葉で終わるこのテキストには，死によってしか解消され得ないほどの，自分が何者であるのかを決定できないことの苦悩と，二重のアイデンティティーに揺らぐ者の悲劇が描かれているのである。

※本稿は2004年度提出の修士論文の一部に加筆修正したものである。なお，本文中に今日から見て差別的な表現があるが，作者執筆当時の状況を考慮したものであることをお断りしておく。